

「社会的基督教」と「東亜協同体論」

— 竹内愛二によるケースワーク論の思想的基盤を問う —

○ 大阪体育大学 今堀 美樹 (会員番号 003286)

キーワード：社会的基督教，東亜協同体論，竹内愛二

1. 研究目的

竹内愛二（1895-1980）がその代表的な著書である『ケース・ワークの理論と実際』（巖松堂，1938）を出版した同じ年に，近衛文麿内閣は「東亜新秩序声明（第2次近衛声明）」を出した。その声明には，以下のような記述があった。

「コノ新秩序ノ建設ハ日滿支三国相携へ，政治，経済，文化等各般ニ互リ互助連環ノ関係ヲ樹立スルヲ以テ根幹トナシ，東亜ニ於ケル国際正義ノ確立，共同防共の達成，新文化ノ創造，経済結合ノ実現ヲ期スルニアリ。是レ実ニ東亜ヲ安定シ，世界ノ進運ニ寄与スル所以ナリ。」

この声明が出されて以後，「新秩序の建設」ということばは「日本の国内外に重くのしかかった閉塞感を打破する現状変革の護符的な言語象徴として人びとの心を惹きつけ，日本の言説空間のなかで広く流通」（松本三之介 2011:227）することとなった。本報告が取り上げる「東亜協同体論」が提唱されたのは，こうした政治状況の下であった。

竹内は1930年に留学先のアメリカから帰国してすぐ，中島重（1888-1946）らによる宗教思想運動「社会的基督教」に共鳴して活動に加わり，当時は中島の片腕とも称されるほどの活躍をしていた。しかし竹内自身も精力的に投稿をした『社会的基督教』誌（1932年5月創刊）には，この第2次近衛声明が出された1938年11月以降，「東亜協同体論」に関する主張が数多く見出されるようになった。それは，1938年12月に発行された第七卷十一号「東亜協同体と社会的基督教」という特集号から，廃刊に追い込まれた1942年1月（表紙には2602年1月という表記）発行の「新亜細亜建設の為に」という特集号に至るまで，一貫して変わることはなかった。

小倉襄二（1926-2014）の，『戦時下抵抗の研究—キリスト者・自由主義者の場合—』（みすず書房，1969）に掲載された「キリスト教社会事業の論理—厚生事業体制と「抵抗」の問題—」という論稿では，『社会的基督教』誌上における竹内の「東亜協同体論」に関する主張も取り上げられて，「時代への迎合と不必要なまでの状況肯定，抵抗の完全不在」（小倉 1969:128）というような厳しい批判がなされた。しかし竹内のそうした主張は，「社会的基督教」という宗教思想運動にかかわるなかで形成されたものであり，その主張の意図は，『社会的基督教』誌上で展開された「東亜協同体論」の全容を明らかにすることなくして，正しく把握することはできないものと考えられる。もとより，小倉の批判は「社

会的基督教」という宗教思想運動自体にも向けられていたと考えられる。しかし、中島をはじめ『社会的基督教』誌上において「東亜協同体論」を声高に主張した人びともまた、近衛文麿のブレン・トラストだった昭和研究会に属する三木清（1897-1945）らの、「東亜協同体論」からの刺激を受けていたことは間違いないと思われる。しかしながら、三木らによる「東亜協同体論」については、近年においてもその評価は定まてはいない。「中国への侵略に加担するための道具とされた」（桂島宣弘 1998:1150）という批判の一方で、「自由と統制を媒介とした新体制の実現をはかるものであった」（米谷匡史 1998:1542）という評価もある。これら今日における「東亜協同体論」の研究水準を反映させて、『社会的基督教』誌上で展開された竹内らの主張を再評価することは、竹内によるケースワーク論の思想的基盤を問ううえで必要不可欠な作業であると考えられる。

以上のようなことをふまえ、本報告の目的は、『社会的基督教』誌上において展開された「東亜協同体論」とその背景に存在した昭和研究会に所属する識者らによる「東亜協同体論」とを照合させ、「社会的基督教」につらなる人びとの主張、なかでも竹内の主張をより正しく把握しようとすることにより、竹内ケースワーク論の基盤にあった思想を問うことである。

2. 研究の視点および方法

本報告の研究方法は、文献研究である。資料としては『社会的基督教』誌、そして「東亜協同体論」に関する近年の先行研究に主な焦点をあてる。

3. 倫理的配慮

本報告における文献の引用等については、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づいて配慮した。

4. 研究結果

廣松渉ほかの編著による『岩波 哲学・思想辞典』（岩波書店、1998）の項目「東亜共同体論」には、「それは、日中戦争の拡大に伴って直面した中国の反日感情との＜和解＞のための＜協同主義＞に基づく連帯という主張であったが、結局は日本の中国侵略に追従する運命にあった（注：傍点筆者）。」（桂島宣弘：1149-1150）と記されている。しかしこれに対し、項目「三木清」には「理念として提示した＜協同主義＞は、諸民族が協同する東亜共同体、そして自由と統制を媒介した新体制の実現をはかるものであった。」（米谷匡史：1542）と記されている。このように、「東亜協同体論」については識者の間にも様々な見解があり、その評価を決定づけることは今日においても困難である。

本報告が取り上げる「東亜共同体論」を扱った近著を、以下にいくつかあげておく。

- ・酒井三郎『昭和研究会—ある知識人集団の軌跡』TBSブリタニカ、1979年。
- ・内田弘編『三木清 東亜共同体論集』こぶし書房、2007年。
- ・三木清『東亜共同体の哲学—世界史的立場と近代東アジア』書肆心水、2007年。
- ・松本三之介『近代日本の中国認識—徳川期儒学から東亜共同体論まで』以文社、2011年。